

各地で活躍するドクター、病院、クリニックを訪問し、医療の内容や今後の展望などを伺い、未来について考察するシリーズ。第10回は、栄養医学・分子整合栄養医学に基づいて先進的な医療を続けている千葉市稲毛区のマリヤ・クリニックを訪ね、ご夫婦二人三脚でよりよい医療を目指して歩んできた経緯と展望を伺いました。お2人のやり取りも含めて紹介させていただきます。

2人で力を合わせながら 独自の栄養治療体系を確立



医療法人社団マリヤ・クリニック(内科・小児科)

柏崎良子医師・柏崎久雄事務長

柏崎良子／横浜市立大学医学部卒業。同大学付属病院第一内科、千葉大学付属病院呼吸器内科、横芝・山崎病院勤務を経て、1987年4月内科・小児科のマリヤ・クリニックを開業。著書に『低血糖症と精神疾患治療の手引』(ヨーゼフ刊)、『栄養医学ガイドブック』(Kindle版)、久雄氏との共著に『神のデザインによる医療』『発達障害の治療の試み』(いずれもヨーゼフ刊)がある。
柏崎久雄／横浜市立大学大学院卒業、MBA(経営管理学修士)取得。結婚後、神学校を卒業し牧師に。現在、牧師を務める傍ら、マリヤ・クリニックの事務長として経営に携わる一方、治療用サプリメントの開発・供給を行う株式会社ヨーゼフを運営。

Q. クリニックの概要をお聞かせください。

柏崎久雄事務長(以下、事務長) 当院は、内科・小児科のクリニックとして1987年に開業以来、主に低血糖症の検査と治療に力を注ぎながら、次の3つの方針を掲げて治療に専念してきました。1つが分子整合栄養医学の推進、2つ目がエビデンスに基づいた治療、3つ目が健康の自主管理の促進です。特に遺伝子情報に基づく適切な栄養を補給することによって体を治していく、分子整合栄養医学に基づいた栄養療法は、大きなウエイトを占めています。また、エビデンスを得るための検査や治療法においては、当院が日本で最初に採り入れたというものがいくつかあります。

それが機能性低血糖症のOGTT(5時間耐糖能負荷試験)、OAT(有機酸検査)、ペプチド検査、IgGアレルギー検査などで、高濃度ビタミンC点滴治療も最初に採り入れました。そのほか、ピロリ菌の検査も積極的に取り組んできました。ピロリ菌は現在では胃がんの原因として認められていますが、私たちが1992年に検査を始めた頃は大学病院でも「みんな当たり前前に持っているものだ」と信じており、「除菌が

必要」と説く私たちは、「金儲けのために、そんなことをするんじゃないか」と言われたものです。

また、健康の自主管理ということにもつながりますが、カウンセリングや栄養指導も大切にしています。生活指導や家族関係のアドバイスなども行っていますが、それは体と心と霊(スピリット)を含めて全体像を理解し、治療に生かしたいからです。精神科や心療内科で神経に作用する薬だけを処方され、なかなか良くならない例がたくさんあります。心の不調の原因が体にある場合もあります。うちでは体を治療して心が治った方もかなりいます。

柏崎良子院長(以下、良子院長) そうですね。薬が完全に必要なくなった人は少ないですが、改善された方は多いですね。

Q. 良子院長はなぜ 医師を目指したのですか。

良子院長 親戚に医者が多かったので、最初は親の勧めで医者を目指しました。ところが、浪人生活の間に、医者に対する思いが大きく変わりました。

浪人中、住まいの目の前に教会があり、聖書を読

むようになりました。お金儲けや世の中で成功するための本があまたあるなか、聖書には「汝の敵のために愛せよ」などと、自分に不都合なことも書いてあります。でも、それを実行すると心に平安が訪れるのです。そして、聖書を読んでいるうちに「自分にはこんないいところがある」と思えるようになりました。自分の心が鏡のように映し出され、私はそのとき「絶対、医者になる」と強く思いました。

それまでは、生き甲斐を求めて無医村に行こうとか、自分の功名心のために医学部に行くといった感じだったのが、まず自分が幸せになって、その幸せな力でほかの人に良い貢献をしようと発想の転換ができました。自分の中にあるものを他の人のために使いたい、医者になって自分の喜びを人の喜びにしようと、自然な感じで思えるようになったのです。

たまたま聖書を読んだことがきっかけでしたが、私の旧友が高校3年のときに亡くなりました。その人がクリスチャンだったということも、関係があったかもしれません。

Q. その後は順調に医師の道に？

良子院長 いいえ、医学生のとくに体調を崩し、鬱々としていました。いchnずな思いはあるのだけど、続かない。思考が続かない。クリスチャンになって、神様に愛される歓びを知っているはずなのに、力がでない。勉強が進まない。で、午後の時間は授業中、いつも寝ていました。

そんな状況から抜け出せたのは、ひとつは医学部卒業間際に主人と結婚をしたこと。主人が本当によく私の話を聞いてくれたのです。主人は神学生だったのですが、勉強をそっちのけで、私の話を聞いてくれました。それから、子どもが生まれたことで、人との交流が始まったこと。また国家試験に受かって世の中で働き出したことから、社会的にも地位が与えられ、社会で生きていく自信が少し持てるようになったからでしょうか。

事務長 彼女の医学生時代の不調は、低血糖症が主な原因だったのですが、そのことから栄養治療の有効性を知りました。医者になってからも、この人は常に一生懸命に、来た患者さんは全部治そうとする。偉いものです。診療に専念してもらうため、私は病院の運営に携わり、主夫として5人の子育ても頑張りましたよ(笑)。栄養治療に必要な良質なサプリメントを提供するための会社も立ち上げました。

Q. 低血糖症以外の治療分野で、 特別なものはありますか。

事務長 栄養治療の中から派生したものですが、2007年くらいから発達障害の治療を開始しました。発達障害は日本では治らないものとして、「治療」ではなく「支援」という言葉で済まされている。けれど、アメリカでは治そうとする努力がいっぱいあります。日本では保険診療が適用されないので、手を出さないだけです。

良子院長 発達障害や低血糖症などの場合は、周囲やほかの病院ではどうしても分かってもらえないけれども、「ここだったら分かってもらえるかもしれない」といった思いで、患者さんたちが訪ねてくるといふ実感はあります。今まではやりようがないと思っていたけれど、何か方法があるかもしれないと、希望を持ってこられる患者さんもいるので、これからも何とか応えていきたいと思っています。

Q. 28年間診療を続けてきた中で、 受診する親御さんたちに何か変化を 感じますか。

良子院長 病気だから病院に行く、早いうちに薬を飲めば治る、それも一理あるのですが、私がアトピーなどアレルギーの子どもの腸内環境の話をして、あまりそういうことは知ろうとしないというか。
事務長 考え方が少し対症療法的過ぎるよね。

良子院長 子どものアレルギーでは、最初に耳鼻科にいくお母さん方が多いのですが、必ず強い抗生剤を出されます。先日、発熱と吐き気がある子どもが来たのですが、ほかの病院でペーラクタマーゼ耐性の抗生剤が出ていました。何でも抗生剤に頼り過ぎる傾向があるように思います。あと、アトピーなどアレルギーのある子ども、ひっかき傷がある子どもが増えているような気がします。

事務長 ホリスティックな考え方をせず、人間がどういうものかを考えないで、とにかく異常が出たら、そこだけを治せばいいという対処の仕方をする。お母さん方が悪いわけでもないんですよ。よかれと思って、すぐに薬を飲ませる。でも、そうやっているうちに、全体として異常を来たしてしまう。それが今の風潮じゃないですかね。どう思う？

良子院長 そうね。前段階でいろいろやれることをやっていないことが多いかな。喘息の子どもには乾布摩擦をして、温度変化に手早く対応できるようにすれば、自律神経の働きにもウイルスに対する抗体を作るのにも役立つのですが……。貧血があると成長も損なわれますが、やはり風邪をひきやすいし、治りにくいですね。風邪の子どもの採血をすると、ほとんどの子どもが貧血を持っています。

Q. 子どもたちには、どんな対応策がありますか。

良子院長 鉄分を採るなら、実は魚がいいんです。25%ほど吸収率があるヘム鉄は魚に多い。ただ肉や魚を食べても、胃の消化力が低く、タンパク質が消化できないと、アミノ酸にまで碎かれずに次の小腸で吸収されません。食後、パッとパソコンだかゲームだかを始めてしまうと、脳に血が回って消化力が落ち着かないまま、酸素が全身に行き渡ってしまうので、消化力が低くなりますね。

3,000くらいある酵素の中で、タンパク質と亜鉛から作られる消化酵素は、だいたい200から300あると

いられています。ですから、やはり亜鉛の摂取は大事です。でも、レトルト食品や加工食品では亜鉛などのミネラルがかなり失われているので、そういった食品に頼ると、どうしても亜鉛が足りなくなる。皮膚の形成にはタンパク質や亜鉛、ビタミンB群やビタミンAなどの抗酸化物質が必要です。皮膚が丈夫にならないと、ひっかき傷で皮膚が壊れやすいですね。

「子どもは風の子」といいますが、そういうたくましさが足りなくなっているのかな。薬を飲めば治るというのではなく、薬は何割かで、そのほかの栄養とか生活習慣とか、その辺に割と大事な要素があることを、もう少し知って欲しいなと思います。

Q. では、サプリメントでは何が有効でしょうか。

良子院長 体を構築し、エネルギーの材料として基本になるのは、やはりタンパク質だと思います。ビタミンCはともかく、ほかのビタミンやミネラルはアルブミンというタンパク質によって運ばれるので、タンパク質が少ないと、薬を飲んでもビタミンを飲んでも効果が期待できません。プロテインはお勧めなのですが、カフェインや糖分が入っているものは推奨できません。ミルクアレルギーの疑いがある場合には、代替ホエープロテインよりは大豆プロテインのほうが無難です。また、プロテインスコアが100に近いもののほうが望ましいですね。

事務長 当院の場合は管理栄養士が5人いるので、症状と検査結果に基づいて、個別にアドバイスしています。タンパク質にしても価格や内容はさまざま。タンパク質の中に亜鉛やビタミンが入っているものや、がんの患者さんなどの場合には、より吸収率がいいもの、アミノ酸系のものなど、タンパク質だけでも10種類くらい揃えています。それは個人差に対応して処方するため、段階を経て、様子を見ながら処方しています。重病の患者さんや精神症状のある患者さんも来ますから、確実に吸収されるよ

うに、品質には非常に気を使っています。

Q. 最後に今後の展望をお聞かせください。

良子院長 低血糖症の治療でも、今まで私たちが培ってきた知識で治療が対応できる人は7割とか8割なので、それ以外にも体のメカニズムとして、何か別のものがあるのではないかという目を常に持ってやっていくことと、遠隔地から来る方も多いので、対応方法などは今後少し練り直していかなくてはならないかな。発達障害に関しては、着実に1人ひとりに丁寧に向き合って治していきたいと思っています。

事務長 私のほうでは、これまで一般社団法人低血糖症治療の会を運営してきました。ここ数年、発達障害治療も増えてきたため、今年の4月に一般社団法人障害治療研修所を設立し、その中に「低血糖症治療の会」と「発達障害治療の会」を組織するつもりです。そして、その会員の患者さんたちがお互いに交流する機会を設けたいと思っています。

当院のチーム医療という意味では、この先、心強いと思えることもあるんですよ。長女は今カナダに行っていますが医者ですし、長男はうちのサプリー社の部長です。次男はこのクリニックの4階に住んでいて、自分の仕事をしていますが、次女はクリニックの受付。三女は管理栄養士です。

スタッフの養成は私が担当しています。医療というのは単にノウハウだけではないので、携わるスタッフは、丁寧に時間をかけて育てなければいけないと思っています。日々患者さんと向き合っている医者では、とても時間をかけられないでしょ？

良子院長 そうね。私1人ではとても無理です。治療はその人の人格の中でとらえて、その人自身に向き合わなくてはけません。その人が自身の人格の中で一歩足を踏み出す選択として、サプリーをどの程度摂るのか、どういう生活スタイルを取ろうか、人生をどう切り開こうか、そういうことをその人が選ん

で前に進まないといけないので、やはりそれなりの猶予を与えなくてはいけないですね。

押しつけの医療ではなく、どういう治療を受けるかという選択は患者さん自身がしていく。サプリーだってお金もかかるし、今まで余裕のない生活をしている人なら、なおさらです。それなりの覚悟と決心、自分の意思決定が必要ですから、そのようにこちらがもっていかなければいけないと思っています。

事務長 患者さんが多くの選択肢を持つためにも、患者さんの資料として、何冊かの書籍を作ってきました。販売もしていますが、もとは配布していたものです。一度に大勢の患者さんに対応できないので、低血糖症の検査の5時間OGTT(ブドウ糖負荷試験)にしろ、新規の患者さんは1日1名。発達障害も午前・午後各1名と限定しています。だから、せめてアドバイスや資料は充実させたいと思っています。



(左)栄養相談コーナー／(右)発達障害の子どもの待合室も1Fに完備
※栄養指導は「家族一緒に」が基本。



(左)患者さんの資料用に何冊もの図書を販売している／(右)1F待合室

医療法人社団マリヤ・クリニック(内科・小児科)
千葉県千葉市稲毛区小仲台6-19-19
TEL.043-287-2624
<http://www.mariyaclinic.com/>
株式会社ヨーゼフ
<http://yozeph.com/>